

郷土芸能の継承と地域意識の形成

—長野県南佐久郡小海町親沢集落・人形三番叟の事例から—

牧野修也（神奈川大学非常勤）

1. 郷土芸能の継承の現代的意義

集落行事として、これまで行われてきた伝統芸能が、存続の困難に直面している所が多く現れていることは周知の通りである。その一方で、集落で行われてきた芸能を継承していこうとする試みがあることも事実である。現実的にはさまざまな困難が存在し、あらゆることがかつてと変わらずに継承されているわけではない。継承し続けるために、「変えても構わないこと」／「変えてはならないこと」の二つに分け、「時代に即して変える」ことで継承し続けていこうとしている。だが、「変えること」によって、かつてとは異なっている部分も少なからず出てきている。

大石泰夫（2007）は、芸能そのものが地域社会に定着する過程において、芸能が本来的に持っている意味を担いつつも、地域社会の独自の論理によって捉え直されることを通じて、地域社会の文脈に基づいて継承されていくことを指摘している。つまり、このことは、地域社会において、ある芸能地域社会の伝統芸能として伝承されていくこと自体が地域社会の特質を示していると見ることができるであろう。こうした地域的特質は不変のものではなく、先に述べたように現実の地域社会の構造の変化、それに伴う生活様式の変化によって変化せざるを得ない側面を有している。しかし、そのことを指摘することを以て、「伝統」的とされるものが「非伝統」的なものであるということを指摘することもあまり意味のあることとは言えない。足立重和（2010）が指摘するように、伝統芸能に携わる人びと

や地域社会に生きる人びとは、継承されてきている「伝統」芸能が、かつての形式と現在が決して不変であるわけがないことを知っていたとしても、伝統芸能としての不変性であることを語るという2つの現実を生きていくからである。そこで、本報告では、人びとが「2つの現実」を生きていく意味を明らかにしていくことにポイントを置いていきたい。

このような視点に立った時、郷土芸能の現代的意味はどこにあるのであろうか。澁谷美紀（2006）は、民俗芸能の存続の現代的根拠を、2つの外部者の視点に求めてく。一つは、地域芸能を観光資源の一つとして捉え直すことによって、都市住民の消費の対象にしようとすることで、地域活性化のためのツールとしようとする行政の立場である。もう一つは、都市住民の消費の対象とすることに対して異を唱え、外部者を排除することで成立してきた地域社会の特質に基づいた伝統芸能を、存続継承していくことに価値を見いだしていく研究者の立場であるとする。だが、この視点においては、伝統芸能を継承する立場である芸能の担い手や地域社会の人びとの視点＝「まなざし」は前面には出てきにくい。このことは、植田今日子（2007）が明らかにしたように、継承の形式や方法を変えてまで、芸能を継承することを拒絶すること＝「滅んでいくこと」を選択した人びとの存在があることから分かる。

したがって、本報告の課題は、継承存続を選択していく伝統芸能としての郷土芸能の担い手や地域の人びとが、いかなる論理

を以て、継承していくかということにある。

2. 報告の対象地

本報告の対象地である長野県南佐久郡小海町親沢集落は、長野県東信地域に位置する小海町の東側に位置する集落である。小海町は、1956年に千曲川を挟んで東西に位置していた小海村と北牧村が合併し、小海町として出発した。親沢集落は小海村に属し、小海村中心部から4キロほど山間部に入ったところに位置し、林業および林産業を主体に農業も営んできた集落である。行政区としては親沢区となっているが、隣接する川平集落の川平区と連合して親川地区として活動することも多い。しかし、川平集落は、親和沢の三番叟に先立って、鹿舞を奉納していることに象徴されるように、2つの集落の間には別の集落であるという意識が明確に存在している。

三番叟と鹿舞は、現在は、4月の第1日曜日に親沢諏訪神社に奉納する芸能である。かつては、4月4日に行われ、これを以て一年の農事が始まったというが、農外就労が多くなり、役者の確保のために現在の日程に変更した。東舞台で鹿舞が行われた後に、西舞台で三番叟が行われる。鹿舞で大地の穢れを払った後に、三番叟で種を播くなどの農耕祈願を行うと理解されているように、両者は不可分の存在である。しかし、2つの集落の芸能の継承システムは大きく異なる。川平が、鹿舞を踊る4人のみを役者とし、囃子方は役者とせず、役者の任期を特に定めていないのに対し、親沢は人形を操る者と囃子方を合わせた12人を役者とし、役者は「弟子-親方-おじっさ」を各7年計21年務めることになっている。その関係は親子関係にも擬せられ、強い上下関係が存在している。役柄もかつては家筋によって決まっていたが、若年人

口の減少によって家筋による役柄は大きく崩れている。そして、現状では、集落内で次の担い手が確保できないという事態も生じている。

3. 人形三番叟を継承していくことの意味

本報告の対象となる親沢集落の人形三番叟については、これまで「三番叟の存在が親沢集落を存続させてきた」という理解が主として語られてきた。もちろん、この言説が誤りであるというわけではないが、集落が存続するということがいかなる意味であるかということ問い直すことも、本報告の課題の一つとなる。

親沢集落の人びとにとって、三番叟が持つ意味は非常に大きい。三番叟を継承させていくことに、三番叟を行うことの意味を見いだしている人も少なくない。しかし、そのことは、三番叟が有する社会的意味を曖昧にしてしまっている側面もある。つまり、三番叟を継承・存続していこうとすることはある目的のための手段であるのか？目的であるのか？が不明瞭になっていくのである。この点を明らかにしていくために、三番叟の出役者と出役経験者へのヒアリングと練習や本番の観察で得られたデータを手がかりに、三番叟に関わる人たちに撮ったの地域意識とその形成プロセスを明らかにしていきたい。

【参考文献】

- 大石泰夫 2007『芸能の〈伝承現場〉論－若者たちの民俗的学びの共同体』ひつじ書房
- 足立重和 2010『郡上八幡伝統を生きる』新曜社
- 澁谷美紀 2006『民俗芸能の伝承生活と地域生活』農文協
- 夏秋・牧野 2011『地域芸能の継承様式変容に関する社会学的研究』國學院大学紀要49